

戦前期の西川満の詩集に現われる閩南語の意義

王 頂 倨

The meaning of Nishikawa Mitsuru's poetry before war

WANG Dingju

Nishikawa Mitsuru may be called a Japanese writer, who was fully activated under the Japanese colonial period in the literary world of Taiwan. He covered various field of Taiwan like the history and culture of Taiwan and published as a literary work. Among his literary work, especially, the use of as in his literary work is considered an interesting. Because 閩南語 was penetrated in Taiwan as a mother tongue of Taiwanese. By examining 閩南語 as the literary work of Nishikawa Mitsuru, the Japanese writers, not only understand the concept and practice of overseas Japanese literature as well as it is thought that they became able to understand the various aspect of Taiwan at that time. In this paper, including 陳藻香の「西川満の台湾的浪漫」based on previous paper, I pointed out those parts that were disregarded, made more good and detailed. Considering the scholastic ability of Nishikawa Mitsuru, featuring the collection of 10 books which were written before the war in 閩南語, I confirm the note of pronunciation with comparing [臺日大辭典].

In this paper, I compare the 閩南語 which is used in the collected poetry of Nishikawa Mitsuru. And classifying the vocabulary and significance of the poetry, I will clarify the meaning of 閩南語.

キーワード：西川満、詩集、閩南語、台湾文化、日本文学

一. はじめに

これまで日本近代文学の研究では、内地日本文学ばかりが注目され、日本統治期下に置かれた外地日本文学が見落とされがちであった。従って、朝鮮、台湾、樺台などで発生した外地日本文学はあまり研究されていない。しかし、外地日本文学の発展はそれほど重要視されなくても、それは日本文学者が築き上げた日本文学の一環であることは意識しなければならない。グローバル化が求められる近代日本文学、その全般的な真髄を見極めるために、その視野は日本内地だけに拘らず、1895年から1945年の間、外地で発生した日本文学にも目を向けるべきである。

日本文学者は外地の文壇での様々な活躍により、新たな文学を開発しながら、文学的価値を更に高めていった。台湾を例に取れば、詩作に熱意を込め、「詩業功勞賞」を受賞した西川満を取上げたい。台湾で脚光を浴びた日本人作家の一人として、台湾特有の風物を題材に、雑誌、小説、詩作、造本など、

様々な分野で文学を発展させてきた。その数々の作品を研究していくことは、台湾文化の研究にもつながる。日本人でありながら、西川満が台湾人の母語に関心を持ち、自らの文学に閩南語を取り入れた意味は大きい。

しかし、西川満の閩南語を取上げた論文は陳藻香の「西川満の台湾的浪漫——詩歌と閩南語——」（『台湾日本語教育論文集第二号』、1994年12月）の一篇しか存在せず、現行の西川満の研究は殆ど『文芸台湾』や『台湾日日新報』などの文芸雑誌に止まっている。

そこで、本稿では植民地時代に台湾で文学活動した西川満を対象に、その作品に使用された閩南語の意義を明らかにしたい。特に、西川満の作品の中で最も特色が見られる詩作を中心に、戦前の作品に登場した閩南語の特徴を探りながら、西川満文学の閩南語の意義を考察していきたいと思う。

二. 西川満と閩南語

1. 台湾における閩南語の形成について

一般的に、閩南語（ミンナン語）¹⁾は主として中国の閩南地方で使われる方言である。即ち漳州、泉州、厦門などを含め、福建省南部で話されている言葉を指す。東南アジアでは福建語とも呼ばれる。広義には、台湾、浙江省南部、広東省東部及び広西省中南部、海南省などで話される、類似性の高い言葉の総称として用いられる。閩南語の使用地域が広がったのは、閩南人が頻繁に海外へ移住したからである。とりわけ明代以降、戦争と飢餓を避けるために、閩南沿海地域の住民は他の土地へと移り始めた。

台湾における閩南人最初の移住地域は澎湖である。楊秀芳『臺灣閩南語語法稿』（台湾大安出版社、1991年4月）によると、南宋の頃から、閩南地方の人は海運を通じ、澎湖まで渡りそこで生活を始めた。これは閩南語が台湾にもたらされた最初であると言われている。明嘉靖以降、泉州と漳州の住民は台湾への移住を続けたが、その数が多くないので、結局台湾の高山族の文化に同化された。1662年鄭成功がオランダ人を台湾から駆逐し、台湾で鄭氏政権を作ったことを契機に、漢人の入台が多くなり、漢文化が台湾で基盤を固めるようになった。そしてそれに伴い、台湾における閩南語の使用も定着するようになった。

2. 西川満と閩南語の使用

西川満は1910年4月、3歳の時、家族とともに台湾に渡り、小学校、中学校は台湾で教育を受けることになった。台湾在学中には、クラスメートは全員日本人であり、台湾人の学生は一人もいなかった²⁾。また、当時台湾の時局は日本の植民地下に置かれ、教育の方針は日本語で施されるため、西川満が閩南語に触れる機会は決して多くなかったと推察できる。更に、閩南語の習得は中国語よりも複雑で、語彙の発音と表記は決まっていないので、例え台湾人でもなかなか習得出来ないものである。

西川満の生前をよく知る台湾真理大学台湾文学資料館の館長張良沢は「西川満先生は中国語は読めま

1) 楊秀芳『臺灣閩南語語法稿』（台湾大安出版社、1991年4月）に基づき、筆者が整理した

2) 近藤正己『西川満札記』（人間の星社、1981年2月12日）14頁

すが、台湾語はほとんどできません³⁾」と述べた。また、陳藻香と西川満とのインタビューでは、西川満は「わたしは閩南語を解せず、作中の閩南語は全く漢籍による机上の学問です⁴⁾」と述べている。つまり、西川満は閩南語は使えないと言える。

しかし、西川満の数々の作品には、膨大な閩南語を登場させている。特に、台湾の風物を示した語彙には、多くの閩南語の表記が見られる。現在台湾の人でもなかなか読めない閩南語の発音が西川満により、正しく表記されことは、実に興味深いことである。陳藻香『日本領台時代の日本人作家——西川満を中心として——』（台湾東呉大学日本文化研究所に提出した博士論文、1995年8月）では、次のように記されている⁵⁾。

作者の述懐によると、閩南語を話せるわけではないため、ルビの発音は殆ど、台湾総督府版の『臺日大辭典』に基づくものだとのことであるが、耳を頼りに記入した俗語もあるように見え、泉州人と漳州人の雑居している台湾という土地で、聴覚に基づいたルビによる発音は、系統としては統一されていないということになる。

以上からわかるように、一部のことわざを除き、西川満は主として『臺日大辭典』を参考に閩南語の発音を記した。本稿ではその言語的な考察をしながら、西川満戦前の詩集を中心に、その閩南語の意義を考察していきたい。

三. 戦前の詩集に現われた閩南語のリスト

西川満の戦前詩集10冊⁶⁾に登場した閩南語の先行研究については、陳藻香「西川満の台湾的浪漫」（『台湾日本語教育論文集第二号』、1994年12月）という論文がある。そこでは詩篇の部分を考察し、西川満が取上げた閩南語の面白さに着眼し、それを「琳瑯满目、美不勝收⁷⁾」と高く評価した。本章は陳藻香が作成した閩南語のリストを参考にして、台湾総督府版の『臺日大辭典』（台湾進学書局、1970年4月復刻版）と引き合わせ、西川満が『臺日大辭典』を参照した語彙の発音と、聴覚に基づいた語彙の発音を下

3) 筆者は2009年3月30日に、台湾真理大学張良沢教授を訪問し、西川満の閩南語の語学力を確認した

4) 陳藻香『日本領台時代の日本人作家——西川満を中心として——』（東呉大学日本文化研究所に提出した博士論文、1995年8月）767頁

5) 陳藻香『日本領台時代の日本人作家——西川満を中心として——』（東呉大学日本文化研究所に提出した博士論文、1995年8月）778頁

6) 西川満戦前の詩集は次の作品である。『初期詩篇』（1930～1935）、『媽祖祭』（媽祖書房、1935年4月）、『亞片』（媽祖書房、1937年7月）、『華麗島頌歌』（日孝山房、1940年9月）、『採蓮花歌』（日孝山房、1941年11月）、『一つの決意』（文芸台湾社、1943年6月）、『延平郡王の歌』（日孝山房、1943年9月）、『摸乳巷の歌』（人間の星社、1973年9月、1934年～1948年の作品を収録）、『柿の歌栗の歌』（人間の星社、1973年11月、1946年～1947年の作品を収録）、『華麗島颯風録』（人間の星社、1980年秋、1935年6月～1937年3月『文芸汎論』に連載したもの）

7) 陳藻香『日本領台時代の日本人作家——西川満を中心として——』（東呉大学日本文化研究所に提出した博士論文、1995年8月）767頁

の図表Aに整理した。「○」のマークが付いている語彙の発音は『臺日大辭典』を参照したものであり、「×」が付いている語彙はそうではないものを示している。また、陳はその閩南語を内容で分類していないが、本章は全体を「食物」、「宗教と風俗」、「諺」、「その他」として分類した。

本稿では、戦前の詩集に登場した閩南語の定義に対して、漢字の傍にカタカタ語が表記されたものとする。ただし、日本語の音読み（苦力^{クリ}、薄紗^{レス}）、人名（呂蒙正^{ルモンチエン}）、地名（基隆^{キイルン}、湄州^{ビチウ}）などの表記は本研究の対象から排除することとした。また、諺の語彙判定において、一句を一語とする。以下、1930年から1948年まで、重出を含め、西川満の戦前詩集に登場した、閩南語の総数は355語である。（「^{アアバン}亞帆」は筆者が新たに付けた語彙である）

図表A

※『初期詩篇』（1930～1935）

①「轎」（1語）（『竹筏』から）

その他	× ^{キヨウ} 轎
-----	--------------------

②「竹筏」（1語）

その他	× ^{テツバイ} 竹筏
-----	----------------------

①「戎克」（3語）（『戎克』から）

宗教と風俗	× ^{ニヤンニヤン} 娘々
-------	------------------------

その他	× ^{ワンバツオ} 黄包車	× ^{キチ} 野鷄
-----	------------------------	--------------------

②「鬚」（4語）

宗教と風俗	× ^{グエトア} 芸妲	× ^{シエンホンイア} 城隍爺
-------	----------------------	--------------------------

その他	○ ^{トアチア} 拖車	× ^{ギナ} 餓鬼	× ^{ロウマア} 老鰻
-----	----------------------	--------------------	----------------------

④「帆」（1語）

その他	○ ^{アアバン} 亞帆
-----	----------------------

③「鳩槃茶鬼」（1語）

宗教と風俗	× ^{セントン} 仙洞
-------	----------------------

①「探春秘図」（1語）（『拾遺』から）

食物	× ^{ロオアンチユウ} 老紅酒
----	--------------------------

②「迎花燈」（2語）

宗教と風俗	ヒエニユウ ×花娘
その他	サイテン ×獅陣

③「聖母昇天」（5語）

宗教と風俗	イアヒエンイウシヌ ×夜行遊神			
その他	ホエコン ×花筐	クヌキアンキヨク ○崑腔曲	アンセエテエン ×紅紗燈	ゲエホアンホアン ×月幻々

※『媽祖祭』（媽祖書房、1935年4月8日）

①「媽祖祭」（28語）

食物	チキテイロオハン ×正鉄羅漢			
宗教と風俗	テンシヨシエンボヨウ ×天上聖母	ツエテン ×祭典	ボツコア ×卜卦	ライフウ ○女巫
	ツェビアウ ×做婊	ホエニユウ ×花娘	ボエ ○筭	ゲエコオ ×芸閣
諺	キンツイラオタイシエンテツゴエ ×近水楼台先得月	ヒヨニヨンホアボツイイホンツウン ×向陽花木易逢春	ンホンオシオンウチエンチエンジツ ×黄河尚有澄清日	キイコジンブウテツウンシイ ×豈可人無得運時
その他	ベエチイ ×白豚	バツニイホエ ×茉莉花	ツウン ×春	トンボンホアチョツイア ×洞房花燭夜
	ホンライコオ ×蓬萊閣	ンテエン ×黄燈	ビェクカアツウン ×百家春	ガツシヤ ×樂社
	フチヨン ×武將	ボオチエヒイ ○布袋戲	コンツウ ○狂子	キウテンハンルウニユウニユウ ×九天玄女娘々
				チヨシエンロンロン ×眾星朗々
				フィヒンタイチン ×飛行大尽
				キブキブズウルツリエン ×急急如律令

②「慶讚城隍爺祭」（19語）

食物	バイクツツン ×排骨湯		
宗教と風俗	トオスウ ○道士	ボアボエ ○擲筭	バイシエン ×排仙
	ボエ ○筭	ロオツウ ×爐主	シエンホンイア ○城隍爺
	フウホアツスウ ×符法師	ツエテン ×祭典	リヨシチオンクン ×兩將軍
	ゲエコオ ×芸閣	ホエニユウ ×花娘	シエンホンイア ○城隍爺
その他	シン ×信	チヨウ ×笑	チヨウ ×笑
	シオツチエン ×肅靜	ホエビイ ×廻避	アンテエン ×紅燈

③「胡人の書」(1語)

その他	チアオファンラン × 食鳥煙人
-----	--------------------

④「頹唐の歌」(23語)

宗教と風俗	ツェビアウ × 倣婁	クイ ○ 神鬼
-------	---------------	------------

諺	テイコン × 天空	テエコ × 地空	ランイアコン × 人亦空	タンロオカツバアタンロオンア × 銅鑼較打銅鑼声
	アウブカツツホアアウブミア × 後母較好後母名	チウテイボオロオ × 上天無路	ジフトエボオムン × 入地無門	

その他	チェンテンベエジツ × 青天白日	コアンテエビオ × 関帝廟	グエライヒオン × 月来香	ホオ ○ 禍	キヨウ × 轎
	クワンインソア × 観音山	ケエチアウ × 客鳥	キンホオロオ × 金胡蘆	トンバンアンテエンイヤ × 洞房紅燈夜	テムダウロクガン × 沈魚落雁
	ピイゴアツツウホア × 閉月羞花	キイテイ ○ 指天	キイトエ × 指地	イヤロン × 夜郎	

④「青盲の賦」(4語)

諺	セエシオンホエホエツアオツアオ × 世上花々草々
---	-----------------------------

その他	チイミイ ○ 青盲	キアボオタイオン × 驚妻大王	ノテエン × 黄燈
-----	--------------	--------------------	--------------

⑥「港祭」(10語)

宗教と風俗	ボツコア × 卜卦	ホエニユウ × 花娘	グエトア × 芸妣
	クイ ○ 神靈	バイバイ ○ 拜々	ツェビアウ × 倣婁

その他	アアビエンタイジン × 鴉片大人	ラヘエアア × 老爺	ロオモア × 鱸鰻	ホエリエン × 火龍
-----	---------------------	---------------	--------------	---------------

⑦「城隍爺祭」(4語)

宗教と風俗	ホエニユウ × 花娘
-------	---------------

その他	カンチウ × 牽手	ベエランホエ × 白蘭花	フウラウツイ × 卦流水
-----	--------------	-----------------	-----------------

※『亞片』（媽祖書房、1937年7月20日）

①「昇天」（1語）

その他	ツンサア ×長衫
-----	-------------

②「神虎」（1語）

宗教と風俗	ボエチヤム ×筭占
-------	--------------

③「文廟」（1語）

その他	ホウ ×好
-----	----------

④「遊戯」（1語）

宗教と風俗	エエヤア ×矮爺
-------	-------------

※『華麗島頌歌』（日孝山房、1940年9月23日）

①「華麗島頌歌」（5語）

その他	カンクレジ ×白牛	クワントオアエン ×閩刀燈	オオグウラン ×烏牛欄
	イェクヘシア ×翌火蛇	ロアンロアン ×暖暖	

②「西仔花歌」（25語）

宗教と風俗	ボエ ○筭	ホエニユウ ×花娘
-------	----------	--------------

諺	アンフンイイツオンキアウタイルウ ×紅粉易粧嬌態女	アウチエンランツオサアジイロン ×無錢難作要兒郎
---	------------------------------	-----------------------------

その他	ニユウベエ ×娘父	アンタウチエン ×案頭燈	アンヘエ ○紅霞	ベツベエ ×北琶	シウイエンホエ ×秀英花
	ゲエホハン ×月幻	シンニユウテン ×新娘燈	セエアア ×西仔	アアビエンクイ ×亞片鬼	シユウバン ×繡房
	コンロンシイ ○糠榔扇	ホイキヤン ×花間	ツンサア ×長衫	アムオオ ○暗烏	ゴツアイリエン ×五彩龍
	パイシイ ○拜四	スウシエツ ×四色	トアヘエ ○大夥	ヒエンフツガン ×杏核眼	ハイロオ ○海路
	アイベツリイコオ ×哀別離苦				

③「上元祭」（4語）

宗教と風俗	ボエ ○筭
-------	----------

その他	ツンサア ×長衫	キヨウ ×轎	ランサイ ○弄獅
-----	-------------	-----------	-------------

④「玄壇爺」(3語)

宗教と風俗	ヘンタンイア ×玄壇爺	ヘンタンイア ×玄壇爺
その他	トアボウ ×大炮	

⑤「大天后宮の歌」(2語)

宗教と風俗	ホエニユウ ×花娘	○簪
-------	--------------	----

⑤「精霊祭の歌」(4語)

食物	パ ラ ー ×番石榴	
宗教と風俗	ホアヒアテイ ×好兄弟	
その他	チエンコオ ×燈篙	シオチア ×小姐

※『採蓮花歌』(日孝山房、1941年11月21日)

①「月夜傾斜の歌」(3語)

食物	イウチアケエ ○油車糶	パイクツツン ×排骨湯
宗教と風俗	ホエニユウ ×花娘	

②「平樂遊の歌」(3語)

その他	ツウバン ×厨房	シオチア ×小姐	クンツウ ×裙子
-----	-------------	-------------	-------------

※『摸乳巷の歌』(人間の星社、1973年9月23日、1934年～1948年の作品を収録)

①「花妖箋」(14語)

食物	ヘエシオトオ ○火烧刀				
宗教と風俗	ヘンルウニユウニユウ ×玄女娘々		ジイゴギン ×二五銀		
その他	イケンボンボン ×炎焔々	ホエタンホエサイ ×花東花西	カウツエエテン ×猴齊天	ボオタンホエ ×牡丹花	シオチア ×小姐
	ヒヤンベエボオ ×響馬婆	フヌアン ○雲冠	テアウサイ ×跳獅	ロオコオカン ×鑼鼓館	ビイルウ ○美女
	トオアアテエン ○兔仔燈				

※『柿の歌栗の歌』（人間の星社、1973年11月23日、1946年～1947年の作品を収録）

①「夾竹桃の歌」（2語）

その他	シオチア ×小姐	ツンサア ×長衫
-----	-------------	-------------

※『華麗島顕風録』（人間の星社、1980年秋、1935年6月～1937年3月『文芸汎論』に連載したものをまとめ）

①「城隍廟」（4語）

宗教と風俗	ロツウ ×爐主	ホエニユウ ×花娘	ホエ ○簪
その他	シン ×信		

②「江山楼付近」（5語）

宗教と風俗	ツェビアウ ×倣婁	グエトア ×芸妲	
その他	ツンサン ×長衫	テインアカア ×停仔脚	ンチエン ×黄燈

③「栽花換斗」（12語）

宗教と風俗	ツアイホエオアタウ ×栽花換斗	ホエニユウ ×花娘	ツアイホエオアタウ ×栽花換斗	ツウシイニユウニユウ ×註生娘々
諺	チツチツスウシブキユウ ×七七四十九	ムンニユウホオグエイウ ×問娘何月有	ツウキイブウシエンニン ×除起母生年	
	ツアイテイアンイツシブキユウ ×再添一十九	シイラムホントアウイ ×是男逢単位	シイリイゼツシエンシアン ×是女必成雙	
その他	テインアカア ×停仔脚		リエンチアウホエ ×蓮招花	

④「凌雲禪寺」（1語）

その他	アアマア ○阿媽
-----	-------------

⑤「七娘媽生」（2語）

宗教と風俗	チツニユウマアシイ ×七娘媽生
その他	シンニユウチエン ×新娘燈

⑥「十二娘」（2語）

その他	ツンサン ×長衫	ツンサン ×長衫
-----	-------------	-------------

⑦「普渡」(18語)

食物	ツアン × 粽		ビイフン × 米粉		
宗教と風俗	ポオトオ × 普渡	クイムン × 鬼門	ホオヒアテイ × 好兄弟	トウスウ ○ 道士	グエトア × 芸妲
	ロツウ × 爐主	ツイテエン × 水燈	ジイゴオボン × 二五銀	ホエキイ × 花妓	
その他	テエンコオ × 燈篙	コオビイ × 孤棚	ケツツアイ × 結綵	ツンサア × 長衫	テアウシウ × 柱首
	ポオタンホエ × 牡丹花	ホエテエン × 花燈			

⑧「過火」(8語)

宗教と風俗	ケエヘエ × 過火	タンキイ ○ 童乩	ケエヘエ × 過火
その他	ベエクン × 白裙	トオコア × 肚綰	キイ ○ 乩
			キアトオタウ ○ 站卓頭
			リエンキヨウ × 輦轎

⑧「洞房花燭」(45語)

食物	キヨウタウイン × 轎斗円		キヨウタウテイカア × 轎斗猪脚		
宗教と風俗	ツオアシンツウ × 娶神主				
諺	ツウスタン ○ 子孫桶	ケエホオテイエン × 過戸闕	フウツウカアホオバンスウシエン × 夫妻家和万事成	ダアテイキヨウムンリヨンヒエンクイ × 今着轎門両旁開	
	キムギンツァイポオツオエチツツイ × 金銀財宝做一堆	シンニユウシンサイジツパンライ × 新娘新郎入房内	シイキアシンスンチムシウツァイ × 生子生孫連秀才		
その他	トンバンホエチオツ × 洞房花燭	バアタウ × 盤頭	ヒウクン × 裘裙	シンニユウ × 新娘	キヨウ × 轎
	チウキヨウ × 上轎	テエツセエ × 竹梳	ムイランキヨウ × 媒人轎	ツオアケエ × 娶嫁	クワイア ○ 舅爺
	キヨンテエン × 宮燈	ジイシイテエン × 字姓燈	チェツァイ × 叔爺	ツァアリアウ × 柴料	コオツオエ × 鼓吹
	バアタンバアコオ × 百裙百褲	クンシア × 扛檯	バンバウ ○ 放炮	シンニユウキヨウ × 新娘轎	ビイタイ × 米篩
	バアケエカン × 伴嫁嫗	ツウスタン × 子孫桶	チンバン × 進房	アンバウ ○ 紅包	アンバウ ○ 紅包
	ケエツン ○ 嫁粧	コオツオエ × 鼓吹	ツツキヨウ × 出轎	シンニユウキヨウ × 新娘轎	シクウ × 四句
	ホオミアラン ○ 好命人	ビイタイ × 米篩	シイトア ○ 生炭	トンバン × 洞房	チウツウ × 上床

⑩「符法師」(9語)

宗教と風俗	フウホアツスウ × 符法師	コオベンイアウ ○ 孤貧天	フウホアツスウ × 符法師	タウフウホアツ × 鬪符法
	クウシアアツァ × 驅邪押煞	イイクイチウクワイ × 依鬼就鬼	ヒオアロオ × 葉仔路	フウアロオ × 符仔路

戦前期の西川満の詩集に現われる閩南語の意義 (王)

その他	クツトウ ○骨刀
-----	-------------

⑪「中秋節」(11語)

食物	ゲエビア ×月餅	イウチアケエ ○油車糰
----	-------------	----------------

宗教と風俗	ホエニユウ ×花娘	ティアヒウ ×聽香
-------	--------------	--------------

諺	コアンテイシ ×観簪神	コアンテイクイ ×観簪鬼	チアリイチウトアティア ×請備上大亭
	チアベエイブン ×食白米飯	ホエケエカアツイ ×配雞脚腿	

その他	ヒウトオ ×香草	バイゲエ ×拜月
-----	-------------	-------------

⑫「誕生」(18語)

(満月)

諺	バアヒオバアヒオボエチアソア ×鷓鴣鷓鴣飛上山	ギンナアコアイツオエコア ×囡仔快做官	バアヒオボエコアンコアン ×鷓鴣飛高々
	バアヒオボエケエケエ ×鷓鴣飛低々	ギンナアコアイツオエベエ ×囡仔快做父	

その他	モアゲエ ○满月	トウベエ ×頭尾	ゲエライバン ○月内房	コエツエエ ×鷄篋	コエツエエ ×鷄篋
-----	-------------	-------------	----------------	--------------	--------------

(度歳)

食物	ツアンア ×葱仔	バオウア ×包仔
----	-------------	-------------

その他	トオツエ ×度歳	シウノア ○收涎	バイシア ×拜謝
	バツシエントウ ×八仙卓	ツァミア ×柴樛	カム ○砍

⑬「天上聖母」(2語)

その他	ツンサア ×長衫	サア ○衫
-----	-------------	----------

⑭「送神・辞年」(26語)

食物	チイケエ ○甜糰	ツウンブン ×春飯	ラムキアシオコエ ×南京燒鷄
	ホアツケエ ×發糰	キムギンズン ×金銀筍	ヒエンジンタウフウ ×杏仁豆腐

宗教と風俗	サンシン ○送神	シイニイ ○辞年	ギョツホンシヨンテエ ×玉皇上帝	サンシン ○送神
	シンバイツォア ×神馬錢	チエンツン ○筊 黑	ホンイン ×封印	シイニイ ○辞年

その他	ボエリエン × 賣聯	アンツオア × 紅紙	テエツヒユ × 竹香	ツンサア × 長衫	パツシエントオ ○ 八仙卓
	ラウヘエアア ○ 老歳仔	ツウンリエン × 春聯	ケエニイ ○ 過年	ツウンアアホエ × 春仔花	ムンチアム × 門箋
	ウイロオ ○ 囲爐	シムプウアア ○ 媳婦	カツバン × 合房		

⑮ 「燈爺」(17語)

食物	イウチアケエ ○ 油車糶
----	-----------------

宗教と風俗	テイアヒウ × 聴香	ボエ ○ 簪	ホエニユウ × 花娘
-------	---------------	-----------	---------------

その他	チエンイア × 燈爺	ツアウベエチエン × 走馬燈	ホエデン × 花燈	ティンアカア × 停仔脚	コンコオ ○ 講古
	オオカウ ○ 烏狗	ツンサン × 長衫	イオケイチュウ × 揺錢樹	チエンホオ × 燈虎	リオンチエン × 龍燈
	リオンツウ × 龍珠	ランリエン ○ 弄龍	サイティン × 獅陣		

四. 西川満の作品における閩南語の特徴と類別

二章に挙げた一覧表からわかるように、西川満の戦前期詩集において、閩南語355語が収録されていた。食物を代表した語彙を皮切りに、台湾の民族風情を醸し出した諺など数多く閩南語を使用した。これら西川満の使用した多数の閩南語について、「食物」、「風俗と宗教」、「諺」、「その他」の4つの分野に分類し、それぞれの項目における特徴を論じてみたい。語彙の分類においては、『西川満全詩集』の註解を参考に、また詩作に現われた閩南語の意味を考えた上、それぞれの種類を明らかにする。

1. 食物の語彙 (22語)

「食物」は西川満の詩作に登場した閩南語のうち、最も少ないものである。22語の内、ウーロン茶の「正鉄羅漢」と焼酌の「火焼刀」を除き、飲み物より食べ物のほうが多く占めている。食材の「葱仔」や台湾の家庭料理として知られている「排骨湯」を初め、伝統の結婚式しか出されない「轎斗猪脚」までも取上げている。更に、旧正月の時に神様に出した供え物の「春飯」、「甜糶」などの披露が実に多彩多様である。全体的には、西川満は台湾の庶民料理に着眼しながらも、台湾人の生活をめぐる様々な恒例行事に出した料理に強い関心を示している。

2. 宗教と風俗の語彙 (92語)

宗教にまつわる慣わしの通称を「宗教」とする。それに対して、当時の台湾社会に起きた様々な現象を表象した語彙を「風俗」とする。宗教と風俗は常に同一視されるため、ここでは宗教と風俗を細かく分類しないようにする。

上記のリストからわかるように、神様の名前、祭や道教に関係する風物がしばしば作品に描かれた。

子供の時、西川満はすでに大稻埕の算命老人に心引かれたのだろうか⁸⁾。その影響で、台湾の寺廟で運勢と吉兇を神意で判断する占いの「筮」が数多く取上げられた。そして、「爐主」、「童乩」を初めに、徐々に読者を神秘的な道教世界へと導いていったのである。「栽花換斗」や「符法師」など秘術の導入により、「普度」の行事を通し、もう一つの世界にある「好兄弟」を迎えるようになった。即ち、西川満の宗教用語は台湾人が禁忌している物事に拘っていることがわかった。

一方、「芸姐」、「倣婁」、「花娘」、「花妓」など、昔の台湾風俗の一つを代表している語彙がしきりに詩集に使用されている。当時台北の大稻埕にある江山楼、蓬萊閣などの料亭の活気とともに、風俗業も活発に動くようになった。西川は、子供の時から大稻埕で活動し、そこにある異国情緒に魅了されていった。1934年「台湾日日新報社」に入社し専門文学者になってからは、やがてそれらの社会現象を作品に収めるようになったのである。ただし、西川満が描いた風俗は徐々に祭りと結びつくようになった。祭りの場面描写において、風俗に従事する女たちの姿が度々見られる。「媽祖祭」でも「慶讚城隍爺祭」でも「城隍爺祭」でも、皆そうであった。「港祭」になると、「花娘」、「倣婁」と一緒に、「芸姐」も登場してきた。西川満の風俗を考える上では、宗教、とりわけ祭りという背景を無視することはできないと思われる。

3. 諺の語彙 (37語)

諺は祖先たちの貴重な知恵を込め、大きな価値があることはいうまでもない。普通の生活体験から社会の常識まで、古くから言い伝えられてきた。台湾でも色々な諺がある。教育を意味するものもあれば、社会の諸現象を反映していた諺もある。それらの多くは閩南語で発音しないと面白く表現できない。西川満は閩南語ができないにもかかわらず、諺の意味を究め、様々な場面でそれを表出しようとした。『華麗島頭風録』に収録された「洞房花燭」を例に取れば、家庭の和睦を講ずる「夫妻家和万事成」、新婚の祝いとして使われる「新娘新婚入房内、生子生孫連秀才」が取り入れられている。37語の語彙には、教訓的なものが少なく、そのかわりに縁起のよい諺が西川満に好まれるらしく、しばしば作品の中に引用されている。

4. その他の語彙 (204語)

生活、行事、台湾風物など上述の項目に収められない語彙を「その他」とする。台湾の風情に富んだものに、閩南語が一番多く使われていた。「老鰻」、「青盲」、「老歳仔」のような通称は台湾人に親しまれると同時に、「賣聯」、「囿爐」などの語彙からは台湾の伝統的なものが感じられる。また、台湾の社会で次第に姿を消していった伝統文化の「布袋戲」や現代の台湾家屋ではほとんど見られない「停仔脚」の紹介もされている。

以上、西川満戦前の詩作に登場してきた閩南語の特徴を論じた。西川満は、台湾の歴史及び伝統文化に愛着心を抱き、様々な面白い閩南語を発掘し、作品に表現しようとした。4項目でまとめて見ると、その種類は様々で、ほとんど台湾人の日常生活にかかわった語彙であることがわかった。そのうち、既

8) 王頂倨「台北大稻埕と西川満の文学」(『南島史学』第72号、2008年11月10日) 59頁

に台湾人に忘れかけられた閩南語もあれば、台湾人の周りに今でも使い続けられてきた閩南語も数多くある。台湾の風物に興味を抱き、西川満は閩南語を大切に扱ったのである。

五. 西川満の閩南語の意義

外地日本文学の開拓において、西川満は貢献をしてきた。台湾で新たな素材を求め、見事に文学に昇華させた。台湾の言語である閩南語が西川満の作品に活用されたことも当然無視できない。本章では、西川満の詩作に披露した閩南語の意義とその働きを考察していきたい。

1. 内地日本文学との区別

日本統治下に台湾という外地の日本文学発展について、西川満はどのように考えているのだろうか。現存の資料では「台湾文芸界の展望」という記事が最もその態度を明らかにしているであろう。

かく観じ来つて、つくづく思ふのは、開花期にある台湾の文芸は、今後あくまで台湾独自の発達をとげねばならないと云うことである。断じて中央文芸の亜流や、従属的な作品であつてならない。かのフレデリック・ミストラルが、南仏の寒村にあつて、巴里の都市文芸をも凌ぐプロヴァンス語による珠玉の詩を生み、遂に宏大な宮殿にも比べすべき輝かしきプロヴァンス文学を樹立、心あるひとをして永く賛仰の声を発せしめたやうに、わが南海の華麗島にも当然その名にふさはしい文芸を生み、日本文学史特異の地位を占むべきである。(中略) 南は南、北は北、明るく澄みわたる光の国にありながら、いつまでも暗い北国の雪空を思つて何になる。日本はやがて台湾を中心としてゆく南にのびてゆくであらう。(中略) 華麗島の文芸をして、南海にふさはしき、天にそそり立つ巨峯たらしむること、これらわれらの天職である⁹⁾。(傍線：王頂倨)

外地日本文学は日本の中央主流に従わず、独自に発展しなければならないと西川満は言うのである。そして、結局の所、外地日本文学も日本文学史上の一部とならねばならないというのが西川満の考えであった。

外地日本文学がより発展していくために、西川満は台湾にまつわる風物、及び民間伝説を取材していった。それについては、既に多くの研究者が言及している。例えば、張良沢は「戦前台湾における日本文学——西川満を例として——」(『国際日本文学研究集会会議録』、1980年2月)で、西川満文学の意義の一つを「台湾の民間文芸を香り高い文学に昇華させた」と指摘している。また島田謹二は「詩集『媽祖祭』讀後」(『愛書』6、1936年4月)で、「作品に登場した詩材は東邦民族話中の超人間の存在から、台湾土俗書の日常觸目的存在まで豊富である」と評価した。しかし、それより更に注目したいのは閩南語が活用されたことである。先の「台湾文芸界の展望」の中で示された「南は南、北は北」の信念に基づき、台湾という華麗島の風情に相応しい文学の構築において、閩南語の使用が大きく働いた。作品に

9) 西川満「台湾文芸界の展望」(『台湾時報』1月号、1939年1月1日)84~85頁

台湾人の言葉を入れることにより、今までの内地日本文学との区別ができると同時に、台湾の熱帯風情も醸し出すことができた。『華麗島颯風録』を例にすれば、「洞房花燭」や「送神・辞年」など、閩南語を多く使用して、台湾特有の雰囲気を表出した。内地日本文学ではなかなか見られない表現として、西川満が台湾で取り組んだ文学は異彩を放った。

といっても、西川満にとって台湾で発展した文学はあくまでも日本文学の一環として位置づけられる。『西川満全詩集』に収められた数々の作品では、その考えが明確に説明されている。一つの語彙の表記において、西川満は閩南語だけでなく、日本語の発音も取り入れたからである。例えば、「長衫」の「ツンサア」と「ちようさん」、停仔脚の「テインアカア」と「ていしきやく」のように、一つの語彙に対し、日本語の閩南語の二つの発音で表記した。それと同様に「城隍爺」（「シエンホンイア」と「じようこうや」）、「茉莉花」（「バツニイホエ」と「まつりか」）や「月来香」（「ゲエライヒオン」と「げつらいこう」）などがある。一つの語彙を閩南語と日本語それぞれの発音で二重に表記した。台湾風物にまつわる語彙に閩南語と日本語の発音をつけることで、西川満は日本文学史に外地日本文学という一つのジャンルを位置づけようとしていた。更に、西川満は日本語と閩南語の発音の組み合わせで、「老牽手」（ろうカンチウ）、や「海路万里」（ハイロオまんり）などのように、西川独自の造語を作成した。複数言語の発音を同一語彙に表記し、閩南語と日本語との繋がりを強めたといえる。

以上のように、閩南語を活用し、西川満は台湾で日本にはなかった文学の展開を試みた。そして、日本語と閩南語の発音を作中にちりばめることで、日本文学史に台湾という特異の外地日本文学の地位の樹立を望んでいる。即ち西川満は台湾で、内地日本文学とは異なる文学を構築すると同時に、外地日本文学の発展にも力を入れようとしたのであった。

2. 芸術への昇華

西川満は非常に美本作りに拘り、戦時下、左翼の人々に「贅澤きわまりない¹⁰⁾」と言われても、「美」の信念を貫き、戦時下に日本各地から取り寄せた和紙と再生紙を使用し、豪華な詩集『一つの決意』（文芸台湾社、1943年6月）を発行したりした。「美」への意識については、閩南語の使用にも現れている。例えば、「祈求平安の獅陣」、「雨の中を、銅鑼は鳴り、火龍は狂う」、「暗烏の夜空に燃える五彩龍」や「ああ、一天の星斗。忽然と濃藍の轎は下りくる。誰かを迎える弄獅ぞ」などは、一見台湾の宗教風俗の光景を描いたように思われるが、西川満の芸術的な表現である。とりわけ閩南語で「獅陣」、「火龍」、「五彩龍」、「弄獅」のような南方の風情に富み、幻想的な語彙が詩中に組み入れられたことで、台湾の美しさが強調された。矢野峰人と島田謹二は西川満の閩南語に着眼し、『媽祖祭』（媽祖書房、1935年4月）を次のように述べた。

西川君の想像は恣に天地に飛翔し、そこに絢爛たる樓閣を描き終る迄、容易にその翼を斂めとはしない。（中略）殊に篇中巧みに取り入れられた臺灣語の滑なる響きは、突如として好もしき變化を齎

10) 西川満『わが越し幾山河』（人間の星社、1983年6月6日）36頁

す上に頗る効果的である¹¹⁾。(矢野峰人)

『媽祖祭』の表現要素を分析するとき、この詩集の特徴はいよいよ明らかとならう。その語彙は、詩材に於て述べたやうに、亭仔脚といひ(中略)異香高き種種珍奇な用語を採集し、それらを主力とした上、更に白蘭花(ペエランホエ)といひ、祭典(ツェテン)といひ、排仙(パイシエン)といふ、北平方言とは異なる臺灣語獨得の發音を附して、一層華麗島情調を濃厚にせんと志してゐる¹²⁾。(島田謹二)

二人とも閩南語が加えられ、西川満の文学には華やかな趣が見られると評価した。即ち西川満の閩南語は造本と共に、文学においても「美」の展開を見せたのである。

閩南語による潤色は『媽祖祭』だけでなく、他の詩作にも見られる。『摸乳巷の歌』(人間の星社、1973年9月、1934年～1948年の作品を収録)に収録する「花妖箋」には、洗練された閩南語が活かされ、作品の美的価値が高まっていった。以下、閩南語のある部分を摘出する¹³⁾。

正午。茉莉花咲く。水簾の洞府から。南へ駆ける順風耳。^{イヤンボンボン}炎焔々と燃え上がる。赤帝の投げた^{ジイゴオギン}二五銀。
(第三齣)

^{ホエタンホエサイ}花東花西。胡蝶蘭。劍かざして郎君が。巖の上につっ立って。^{カウツエエテン}猴齊天を呼んでいる。ぽっかり浮いた鱗雲。(第五齣)

ああ。うらら。うらら。^{ボオタンホエ}牡丹花。^{シオチア}轎に乗った小姐が。歡喜に胸を躍らせて。花降る園を過ぎてゆく。
(第六齣)

山寨では。無緒腰帶の響馬婆。^{ヒヤンベエボオ}火焼刀を傾けて。^{ヘシオトオ}峯の雲冠みつめてる。^{フヌアン}どろどろと太鼓が鳴って現われた。^{テアウサイ}跳獅の兎分ども。(第七齣)

^{ロオコオカン}鑼鼓館の窓からは。神馬に乗った美女が。^{ビイルウ}兔仔燈を手を持って。^{トアアテエン}遊仙窟へ逃げてゆく。暗い夜空の星に。今眠りゆく花の精。(第八齣)

第三齣では、炎々と燃焼する様子を表現するために、日本語の擬態語が使われず、閩南語の「炎焔々」でより強い印象を訴えた。それに対して、第五齣では、東も西も「花東花西」の閩南語で、出鱈目の有様を強調した。また、「猴齊天」で孫悟空を説明すると、戯れのある場面がより鮮明に表現される。そして、第六齣では、嫁に行く喜びの気持ちを、閩南語の表記で華やかに描出した。「牡丹花」は花嫁の上品でかつ美しい姿に相応しい花をイメージしている。「小姐」は女性に対する優しい通称である。第七齣での「響馬婆」と「火焼刀」は、閩南語ならではの言葉遣いで、逞しく強烈な風景を見せると同時に、「跳獅」を用い、更に勇猛なイメージを表出した。最後の第八齣では、閩南語の「美女」と「兔仔燈」の組み合わせで、かわいい女性の容姿と、南方情調の風流が味わえる。どの描写も閩南語でうまく展開され

11) 矢野峰人「『媽祖祭』禮讚」(『媽祖』6、1934年9月10日)23頁

12) 島田謹二「西川満氏の詩業」(『台湾時報』240、1939年12月19日)

13) 西川満『西川満全詩集』(人間の星社、1982年2月12日)252～253頁

た。閩南語を働かし、西川満の文学は台湾の絢爛たる雰囲気を醸し出し、多彩な視覚効果を呈出したのである。

以上、西川満の文学創作は造本と同時に、常に「美しい」意識を念頭においている。台湾人の言葉である閩南語を用い、優美な場面を表現しながら、「美」的な文学価値を醸し出していったのである。

3. 台湾本土の文化強調

1936年9月、予備役の海軍大将である小林躋造が台湾総督として任用された。小林総督は就任後間もなく、「皇民化運動」と呼ばれる台湾を統治する新たな手段を表明した。基本政策を台湾人の「皇民化」、台湾産業の「工業化」、台湾を東南アジア進出の基地とする「南進基地化」の三つとして立てた。しかし、第一次近衛文相内閣の「国民精神運動総動員計画実施要綱」が発表されると、小林総督は台湾を支配する政策を更に強化し、「新聞の漢文欄の廃止」、「日本語の使用の推進」、「寺や廟の偶像の撤廃」など台湾人の精神改造を図るための政策を実施した¹⁴⁾。

七七事変の発生から、太平洋戦争が終わるまでの間（1937年7月7日～1945年8月15日）、正に台湾人を支配する「皇民化政策」が最も勢いよく進行していた時である。それでも、西川満は台湾人の言語である閩南語を用い、台湾の風俗を描くことで、台湾人の言語と文化の存在を強調していた。皇民化運動の一環として、「台湾慣習儀式禁止」や「寺廟神昇天¹⁵⁾」という台湾の寺廟整理運動が行われた中でも、西川満は閩南語で台湾伝統の慣わしと宗教文化にまつわる多くの語彙を作品に発表した。その例を次に取ってみる¹⁶⁾。

黄昏。海に見える楼台では。通書をひもどく娘父が。案頭燈に灯を入れて。箆を擲げる。
アンファンイ ツオンキアウタイルウ プウチエンランツオサアジイロン
 紅粉易粧嬌態女。無錢難作要兒郎。（中略）

青燈がまたたく。今宵城隍に星が降る。北琶かかえた花娘が。秀英花をかきながら。ときめく胸を抑えてる。

見はるかす月幻の三沙湾。古風な轎がゆらゆらと。みどりの海に運ばれて。錨おろした帆船のマストにかかる新娘燈。
ゲエホハン
シンニウウテン

ああ西仔の花あやめ。霧にかくれた三色旗。おぼろおぼろの甲板に。円座をつくる亞片鬼。懐郷の思念をそそる銅鑼の音が。入江入江にひびきわたる。

繡房で。士官は榿榔扇をかざしつつ。花間の娘を抱きしめる。鵝鳥の長衫乱れて。暗鳥の夜空に燃える五彩龍。
セエアア
シユウバン コンロンシイ ホイキヤン ツンサア アムオオ
ゴツアイリエン

14) 伊藤潔『台湾』（中央公論社、1995年3月30日）125～126頁

15) 寺廟神昇天とは日本の精神の高揚を求める皇民化運動を通じ、家庭の祭壇を日本式に改変する正庁改善と同時に展開されたものに、台湾各地に存在する道教系寺廟齋堂の整理運動である。当時の総督府は道教系を中心とする土地の民間宗教や信仰を近代化への弊害と考え、固有の寺廟を整理し、廃止する方針を定めた。また、廃止された寺廟の跡地は売却または借地として清算し、これらの管理財産を原資として地元の日本語普及を含む皇民教化対策費に充当することを目的としたものである

16) 西川満『西川満全詩集』（人間の星社、1982年2月12日）97～99頁

バイシイ スウシエツ トアヘエ ヒエンフツガン ハイロオ アイベツリイコオ
 拜四。四色棄てた大夥が杏核眼を見開いて。船出の笛を吹き鳴らす。海路万里。養花天。哀別離苦。
 泣くは誰が子ぞ。

以上、1940年に発行された『華麗島頌歌』を引用した「西仔花」の一節である。閩南語表記のある「箏」(ポエ)、北琶(ベツペエ)、「花娘」(ホエニユウ)、新娘燈(シンニユウテン)、繡房(シユウパン)や五彩龍(ゴツアイリエン)など、いずれも台湾伝統の慣わしと宗教文化を表現する語彙である。皇民下政策が激しく進行している真最中でも、西川満は依然として台湾人の母語である閩南語を生かし、文学作品に台湾の風俗と文化を輝かせている。このことから、外地日本文学の実践に西川満が取り組んだ情熱が見られるだけでなく、台湾の歴史文化に彼が抱いている深い愛情を感じざるを得ないと思われる。

六. おわりに

本稿では、西川満戦前の詩作に登場した閩南語を取り上げ、西川文学の閩南語の特徴と意義を考察した。閩南語はできないので、西川満は『臺日大辞典』に基づいたり、耳にした俗語を自分なりに作品に取り入れたりして、閩南語の発音を表記した。それらの作品からは、西川満が拘泥する閩南語のいくつかの特徴が見られる。例えば「宗教と風俗」の語彙使用において、台湾人の禁忌が注目されると同時に、祭りや風俗に従事する女との関わりも強調される。一方、「諺」の閩南語では、結婚式や子供の誕生など縁起のよい祝いの言葉だけが使用され、西川が吉事に纏わる語彙に拘る態度がわかる。

西川満が自分の詩作に閩南語を使用した意義は大きい。内地日本文学になかったジャンル意識の樹立を念頭に、彼は一つの語彙に、閩南語と日本語それぞれの発音を表記し、台湾で、日本文学史上に特異の外地日本文学を構築した。また、芸術への追求を常に心掛けようとして、美本作りとともに美しい文字の表現も求め、南方の情熱特性に富んでいる数多くの閩南語を作品に登場させた。その結果、西川満の詩作では台湾という華麗島の情調が現れ、そして絢爛な文章表現へと結実していったのである。